

公益財団法人 在宅医療助成 勇美記念財団

2016 年度（後期）
一般公募「在宅医療研究への助成」完了報告書

テーマ：訪問看護師による高齢の療養者と主介護者への在宅移行期に
おける支援

申請者：東條 紀子

所属機関：新潟県立看護大学 地域生活看護学領域 老年看護学 助手

提出年月日：平成 30 年 3 月 30 日

I 序論

我が国では高齢化が進み(厚生労働省, 2016a), 2016年の高齢者人口は3,461万人, 総人口に占める割合は27.3%と共に過去最高となった(総務省, 2016). 高齢者の著しい増加に伴い, 疾病構造も変化し, 医療の進歩も加わって, 末期の悪性腫瘍, 難病患者, 急性増悪の状態でも在宅療養が可能となった. 在宅医療にかかる患者の動向(厚生労働省, 2016b)によれば, 訪問診療を受ける患者は, 大幅に増加しており, そのうち年齢階級別の構成比では, 高齢者が大半を占めている. また, 65歳以上要介護者等からみた主な介護者の続柄(内閣府, 2015)をみると, 6割以上が同居している人が主な介護者という現状がある.

また, 国は医療費適正化の総合的な推進に基づく医療費削減の目的で平均在院日数の短縮化, 退院の促進に対する指針を出し, その中で「在宅療養の推進(厚生労働省, 2016c)」をしている. その内容として, 診療報酬改定(厚生労働省, 2016d)での退院調整加算の新設など, 地域包括ケアシステムの構築に向け, 患者がスムーズに在宅療養に移行し, 安心して地域で暮らせる体制整備への取り組みがなされている. しかしながら, 在宅移行期の現状として, 療養者とその家族の退院に関連する療養生活への不安の調査(平松ら, 2010)では, 在宅移行期の退院支援の開始時・退院直前・退院後において多くの不安を抱き, それらの不安は時間経過と共に様々に変化することが示されている. さらに, 高齢患者が退院前後に有する不安・困り事とその関連要因の調査(永田, 2005)では, 家族の介護負担, 医療処置, 緊急時の対応など退院後に不安・困り事が大きいことが報告されている. 在宅移行期における療養生活は, 入院前の生活とは大きく変化し, 生活の再構築を余儀なくされる過渡期である. この時期には, 必要となる医療的処置を生活に組み込み, 在宅療養への円滑な移行に向けた早期の取り組みが求められる. そのため, 療養者と介護者の不安が軽減されるように, 在宅移行期に訪問看護師が果たす役割は大きいと考える.

在宅移行期は, 療養環境が変化する中で不安定な状況になりやすく, 在宅療養期間の中で最も支援を要する時期(長江, 2007)だと報告されている. 訪問看護は, 生活者として患者の全体を捉え, 病院での教育内容を引き継ぎ共有しながら, 患者および家族の生活に合うように医療・介護の調整を行い, 退院後の生活の再構築をめざすことが役割(梨木ら, 2015)である. 訪問看護師は療養者および介護者へ在宅療養で直面する不安や困難に対して, それらを軽減し, 家族が主体的に解決できるように働きかけられていると思われる. しかし, 先行研究では, 在宅移行期における療養者および介護者の不安や困難の研究はあるが, 訪問看護師が療養者と介護者の双方にどのような支援をしているのかを明らかにした研究は散見されているのみで探究する必要があると考えた. そこで, 本研究では, 在宅移行期において高齢の療養者と主介護者に訪問看護師がどのような支援をしているのか, その内容を明らかにすることを目的とする.

II 研究目的

本研究は、訪問看護師による高齢の療養者と主介護者への在宅移行期における支援を明らかにすることである。

III 研究方法

1. 研究デザイン

質的記述的研究デザイン，質的帰納的方法とした。

2. 調査期間

平成 29 年 7 月から 11 月

3. 研究対象者

A 県において、高齢の療養者と主介護者への在宅移行期の支援を経験し、研究の主旨に同意が得られた訪問看護師 7 名を研究参加者とした。

研究参加者の選定においては、5 年以上の訪問看護経験を有し、過去 1 年以内に在宅移行期の看護に携わり、新規に訪問看護サービスを利用した老年期の療養者および主介護者への看護について語る事ができる訪問看護師とした。

4. データ収集方法

訪問看護ステーションの管理者宛てに 1 事業所につき研究協力の依頼文書一式を 1 部送付し、研究協力の依頼を文書で説明した。研究参加者へ研究協力の依頼を文書で説明し、同意が得られる場合に、研究実施者宛てに研究協力の返書を返送してもらい、研究協力の同意を得た。研究実施者が研究の趣旨と倫理的配慮の事項を口頭で説明し、同意を得た上で、研究参加者の希望に合わせて面接の日時等を決定した。

研究協力依頼は再度、面接場所において文書および口頭で説明し、同意を得た後、研究参加同意書に署名を相互に交わした。同意の撤回についても保障し、面接調査を実施した。

インタビューは、インタビューガイドを作成し、療養者と主介護者の不安や困難、具体的な支援などについて半構成的面接を行った。研究参加者に、新規に訪問看護サービスを利用した高齢の療養者と主介護者への在宅移行期の支援について想起してもらい、時間の経過に沿って語ってもらった。面接時間は、研究内容および倫理的配慮の説明を含め、1 人 1 回、60 分以内とした。インタビュー内容は、研究参加者の同意のもと IC レコーダーに録音した。

5. 分析方法

インタビュー内容は、録音した IC レコーダーから研究参加者ごとに逐語録を作成した。次に、研究参加者毎の逐語録を繰り返し読み、研究目的に関連する記述の部分を抜き出し、文脈を損なわないよう要約し、記録単位としてコード化した。

コードは経時的に内容を生成し、在宅移行期を「退院前」「退院直後から 2 週間」「退院後 3 週から 1 か月」の 3 つの時期に分けて分析した。コードは、分析結果の信頼性と妥当性の確保のため、研究参加者にメンバーチェックを依頼した。

次に生成された全記録単位を類似性、相違性の観点で分析し、意味内容が類似するコードを集めて、コードの意味内容を忠実に表す代表サブカテゴリー名をつけた。さらに抽象度をあげて、各サブカテゴリーの意味内容の類似性と相違性を検討し、カテゴリー化して命名した。

全過程で地域看護学に精通する研究者にスーパーバイズを受け、データの信頼性と妥当性を検討した。

III 倫理的配慮

本研究は所属大学の研究倫理審査委員会および学長の承認を得た後に実施した（承認番号 017-1）。

研究参加者へは、研究協力の依頼に際して、研究の趣旨、自由意思であること等について文書および口頭で説明し、同意を得た。また、同意撤回についても、文書と口頭による説明の上、同意の撤回を保障した。個人情報等の取り扱いとして、研究参加者の個人が特定されないように研究用 ID 番号をつけて管理した。また、研究参加者が語る事例の療養者と主介護者の属性については情報の取得を最小限にして、個人が特定されないように匿名化して語ってもらい、個人情報保護を徹底した。

本研究では、研究データに関する記録物は、所属大学のキャビネットに鍵をかけて保管し厳重に管理した。

IV 結果

研究参加者は、看護師経験年数 25.1 ± 5.01 年、訪問看護経験年数 13.3 ± 2.63 年であった。訪問看護ステーションの緊急時の対応体制はいずれも電話連絡対応と訪問対応であった。語られた事例の療養者の属性の内訳は男性 5 名、女性 2 名、年齢は 87.1 ± 6.39 歳であり、要介護度は要介護 2～5 であった。主介護者の属性は、女性 6 名、男性 1 名で、続柄は妻、娘、息子で年齢は 50 歳代～80 歳代であった。インタビュー時間は 1 人あたり 53.7 ± 3.55 分であった。

訪問看護師による高齢の療養者と主介護者への在宅移行期における支援は、退院前では【退院後の資源活用に向けた支援】や、＜介護者が介護のイメージができるように促

す>を含む【スムーズな在宅移行に向けた支援】の2カテゴリーが生成された。

退院直後から2週間の支援では、<退院後の戸惑う場面に同席し療養環境を整える>などの【退院後の療養環境の調整への支援】や、【療養者の健康管理に向けた支援】【介護者が行う緊急時対応への支援】、<介護者の介護方法を肯定的にフィードバックする>を含む【介護者の介護方法の習得への支援】【社会資源の活用に向けた支援】や、【療養生活上の希望・意向を引き出す支援】の6カテゴリーが生成された。

退院後3週から1か月の支援では、【療養者の健康管理の継続に向けた支援】や、<療養者の身体状況の変化を受け止められるようにする>を含む【療養者に起こりうる状況への対処に向けた支援】【療養者と介護者の新たなケアの習得への支援】【療養生活上の希望・意向に沿った支援】の4カテゴリーが生成された。

V 考察

退院前の支援は、病院看護師と訪問看護師の連携により、療養者と介護者が退院後の生活をイメージできるような支援が重視され、スムーズに在宅へ移行できるように、利用できる資源を知り、療養生活への準備を整えることや医療が継続されるための支援が特徴的であった。

退院直後から2週間の支援では、他の時期よりもコード、カテゴリー、サブカテゴリーとも多く、支援の内容が最も多いことが示された。この時期は、退院後の療養生活環境が整い、療養者と介護者が退院後の生活に慣れていけるように支援されていた。そのために、訪問看護師は社会資源を活用し、療養者に合わせたケアを療養者や介護者と一緒に行い、療養者の健康管理に向けての支援が特徴的であった。

退院後3週から1か月の支援では、介護者の介護負担を軽減し、療養者と介護者の希望・意向に沿った療養生活を送れるように、健康管理を継続し、できていることを認め、新たなケアを習得できるような支援が特徴的であった。

在宅移行期における訪問看護師の支援は、家族の療養生活が適応に向かうように、ストレス源の累積をさげ、新規・既存資源の活用、家族の認知を把握し肯定的な意味づけをして家族の対処行動につなげている。訪問看護師は、家族がその状況を乗り越えて療養生活が適応に向かうように対処能力を高めていけるように支えていくことが重要であると考える。

V 研究の限界と課題

本研究では、高齢の療養者と主介護者への在宅移行期における支援について、在宅移行期の時期毎の支援が明らかとなった。しかし、結果はA県の訪問看護師7名という限られた対象者から得られたものである。今後は本研究の結果をもとに、調査地域や対象事例、研究参加者数を増やし、さらなる知見の蓄積が必要である。

VI 結論

1. 訪問看護師による高齢の療養者と主介護者への在宅移行期における支援は、退院前は、【退院後の資源活用に向けた支援】【スムーズな在宅移行に向けた支援】の2つの支援があった。
2. 退院直後から2週間には、【退院後の療養環境の調整への支援】【療養者の健康管理に向けた支援】【介護者が行う緊急時対応への支援】【介護者の介護方法の習得への支援】【社会資源の活用に向けた支援】【療養生活上の希望・意向を引き出す支援】の6つの支援があった。
3. 退院後3週から1か月には、【療養者の健康管理の継続に向けた支援】【療養者に起こりうる状況への対処に向けた支援】【療養者と介護者の新たなケアの習得への支援】【療養生活上の希望・意向に沿った支援】の4つの支援があった。
4. 訪問看護師は、家族の療養生活が適応に向かうように、ストレス源の累積をさけ、新規資源の活用、家族の認知の把握を行い、在宅移行期の時期に合わせた支援をしていることが明らかとなった。

謝辞

本研究の実施にあたり、研究の趣旨をご理解いただき、ご承諾いただいた訪問看護ステーションの管理者様、ならびにご多忙の中、快くインタビューにご協力していただいた訪問看護師の皆様にご心より感謝申し上げます。

なお、本研究は公益財団法人 在宅医療助成 勇美記念財団の助成を受けて実施しました。心より御礼申し上げます。

引用文献

- 厚生労働省 HP (2016a) : 今後の高齢社会の進展～2025年の超高齢者像, <http://www.mhlw.go.jp/shingi/2006/09/dl/s0927-8e.pdf>. (2016.12.1. 閲覧.)
- 厚生労働省 HP (2016b) : 在宅医療にかかる患者の動向(平成28年7月6日. 第1回 全国在宅医療会議資料), <http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-10801000-Iseikyoku-Soumuka/0000129546.pdf>. (2016.12.15. 閲覧.)
- 厚生労働省 HP (2016c) : 在宅医療の推進について, <http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000061944.html>. (2016.12.15. 閲覧.)
- 厚生労働省 HP(2016d) : 平成28年度診療報酬改定について, <http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000106421.html>. (2017.1.17. 閲覧.)
- 長江弘子, 村嶋幸代(2007) : 在宅移行期の家族介護者が生活を立て直すプロセスに関する

る研究—家族介護者にとって生活の安定とは何かに焦点を当てて—, 聖路加看護大学
紀要, 33, 17-25.

永田智子 (2007) : 高齢患者が退院前・退院後に有する不安・困り事とその関連要因,
病院管理, Vol. 44. (4), 5-17.

内閣府 HP (2015) : 平成 27 年版高齢社会白書 (全体版) ,

<http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2015/html/zenbun/index.html>.

(2016.12.15. 閲覧.)

梨木恵実子, 山路聡子, 大槻雪枝, 他(2015) : シンポジウム I・III 訪問看護ステーション
の役割—COPD 患者の生活の再構築をめざして—, 日本呼吸ケア・リハビリテーション
学会誌, 第 25 巻, 2 号, 144-149.

総務省 HP (2016) : 統計からみた我が国の高齢者 (65 歳以上) —〈敬老の日〉にちなんで—,
<http://www.stat.go.jp/data/topics/topi970.htm> f. (2016. 12. 1. 閲覧.)

調査研究を終えた感想

今回, 本研究の実施にあたり, 貴重な助成を受けることができ, 心より御礼申し上げます. 本研究では, 在宅移行期の支援を詳細に調査するために現場で実践されている訪問看護師を研究参加者としてリクルートしました. 研究参加者の確保が難しい点がありましたが, 研究にご協力頂いた訪問看護師の皆様から頂いた貴重な語りから, 訪問看護師が高齢の療養者と主介護者へ在宅移行期にどのような支援をしているのかを, 記述できたことは有益でした. 在宅移行期支援においては, 様々な課題があると思います. 在宅医療を推進するためにも, さらなる研究の蓄積が必要であると, 調査を進める中で改めて実感しました. 今後も高齢者とその家族の在宅療養の一助となるように調査をしていきたいと思ひます.